

技術者からの視点

●第14回●

対面交通考

藍野大学非常勤講師 木下 親郎

日英以外の多くの国が採用している
「車は右、人は左」

人が道路の端を車と向かい合うように進むのを「対面交通」と言う。「車は左、人は右」という、日本で対面交通が始まったときの標語が染み付いた人間には、道路の左側を歩くの方が多くなってきたのが気になる。「道路交通法」は「歩行者は（危険であるとか、やむを得ない場合を除いて）道路の右側端に寄って通行しなければならない」と規定している。車が右側を走る米国でも、歩行者は車と対面するように左側を歩くと決めている。

武士は、左腰に刀を差すので、前面からの敵に対して刀を抜きやすいように、また右手の暗闇に隠れた敵に対応できる時間的な余裕を持つために、左側を歩くといわれる。日本人は左側を歩く方が安心なのだろうか。一方、西欧の馬車では、馭者が右側に座るのが普通で、右手で操作する鞭が対向車にあたらないうように右側を走ったと言われる。そうだとすると「車が右、人は左」の対面交通が自然なのかも知れない。

現在では多くの国が車の右側通行を採用しており、左側通行は旧大英帝国圏に関係のあった国と日本などで少数派だ。ナポレオンが右側通行を決めたので、英国が逆方向を採用したというが定かでない。英国人は「ライトハンド・ドライブ（右側運転席の左側通行）」

がライト（正しい）」と主張し、米国人は「ライトハンド・トラフィック（右側通行）がライト」と主張する」という英語のジョークがある。利き手と同様に、眼にも利き目があり、右眼を利き目にする人が多いので、左側通行の方が対向車やドアマミラーを利き目でみることになり安全面でも有利であるとの説もある。スウェーデンは左側通行であったのを、ヨーロッパ諸国にあわせて右側通行に変えたが、それ以来衝突事故が増えたとの統計資料があるようだ。

航空機と船舶は 右側通行が国際的ルール

自動車も右側通行の国でも鉄道は左側通行という国が多い。イタリア、スウェーデン、スイス、中国、フランス、ベルギーは左側通行である。ドイツの鉄道は右側通行なので、周辺国への乗り入れ部分では細工が必要になっているが、英仏海峡トンネルではその必要がなかった。

航空機と船舶は国際的に右側通行に統一されている。すれ違う際には進行方向の右側に見えるほうが優先権を持っており、相手を右に見た方は右方向に回避しなければならない。その結果、両者の左舷（進行方向に向かって左側）同士が向かい合ってすれ違う。船舶は右舷に舵があった。それで右舷を「ステアボード（操縦側）」と呼び、訛って「スタ

「ポード」になったという。停泊するときには舵を傷めないように左舷を接岸させるので左舷は「ポード」と呼ばれる。旅客機の出入り口が左についているのも伝統を引継いだのであろう。航空機、船舶のいずれも左側に赤色、右側に緑色の灯をつける決まりになっている。英国人はこれを、「ポード・イズ・レッド」と言う。大好きなポード（ワイン）の赤い色を「左翼」に引っ掛けたのである。

利用者の知恵が生んだ エスカレーターの片側歩行

最近エスカレーターが増えた。建物の中だけではなく、駅や地下街から、道路や広場と直接つながっているものも多い。階段が無くて、上り下りのエスカレーターだけの場所も現れており、エスカレーター利用の安全規則を考えなければならぬ時期と思う。現在は、エスカレーターの片側を、歩く人のために空けるという習慣が出来上がっている。世界では踏み板の右側に立つのが一般的だが、日本では、近畿圏を除いて左側に立ち右側を歩くのが主流になっている。飛行時間が一時間とかからないのに、羽田空港で左側に立った人たちが、伊丹空港では見事に右側に立っている。エスカレーターの片側歩行は長いエスカレーターで、急ぐ人に道を譲る利用者の知恵が生んだ慣行であろう。

このごろは、歩行者側が空いていても、立

ち止まって乗る側の乗り場に長い行列が出来ていることが多く、片側歩行の習慣がcaえつて混雑を作り出している。また歩行する側を駆け上がる人が、立ち止まっている人に接触して、あわや事故という状況を見かけることもある。エスカレーターを設計する立場からは、利用者は歩かずに、踏み板に均等な荷重がかかるように乗ってほしい。多くの人が踏み板の片側だけに乗ると余計な力がかかることになり、それに耐える強度が必要になる。駆け上がったたり、駆け下りたりすると踏み板には衝撃的な力が余分に加わる。最近、利用者の安全を考え、エスカレーター歩行の禁止を呼びかける場所が多くなったが、ほとんど無視されている。

過度の安全性要求は 資源の無駄遣いにつながる

技術者にとって残念なのは、安全設計を徹底すると、利用者が製品の安全問題を考えようとしなくなることである。過度の安全性要求は、過剰設計になり、資源の無駄遣いと価格の上昇につながる。エネルギー消費を少なくしようとする二一世紀の消費者には、製品に過度の安全性を要求しない良識が必要である。日本人の多くは、安全に関する技術説明を理解し判断できるだけの教育を受けている。したがって、技術者は消費者に対して、安全問題と省エネルギーについて積極的な提

言を行い、消費者はその提言を真摯に検討してほしい。しかし「優先座席」や「バス優先レーン」の提起に見られるように、厳しい罰則のない提案は無視されるのが現実である。マスメディアも、一般論としては国の規制を緩和しろと叫んでいるが、安全関連の事故が発生すると、技術者の説明を聞こうとせず、国の規制の盲点を血眼になって探し求める。そして、がんじがらめの安全規制を国に求める大合唱になる。しかしながら、安全設計には利用者の良識を前提とした適切な信頼性の見積もりが必要なのである。利用者の便宜を考えて、エスカレーターの片側歩行を見事に定着させた我々だから、安全面や運用面での技術的な説明が与えられれば、政府の規制がなくても、階段を苦手とする人が安心してエスカレーターを利用し、急ぐ人や健康志向の人は階段を利用するという新しい不文律が出来るものと思いたい。

